

仁勢物語論

——作者のとらえた「雅」と「俗」——

三十六回卒 安武 由紀子

序

『仁勢物語』は、『仁勢物語』(流布本)百二十五段を、
逐語的にもじった滑稽文学である。成立は寛永十六年(一
六三九)前後と推定され、作者は未詳となっている。古来、
『伊勢物語』ほど、後代の文学作品や芸能に深い影響を及
ぼしたものは類をみないが、その中でも『仁勢物語』は、
近世初期の『伊勢物語』流行の下でこそ生まれ得たといえ
るものである。ただこの作品の中では、『伊勢物語』の古典
的「雅」の世界が、近世の「俗」へと完全に転化されてい
るため、野間（金）光辰氏等より、古典的伝統を批判しよう
としたものだという意見が出されている。しかし本当にそ
うなのか。私はこの点に疑念を抱き、作者の執筆意図は何
なのか、何を描こうとしたのかを、作品の「俗」化の方法
を辿りながら、古典の「雅」と近世の「俗」に対する態度
なども探り、考察していくこととした。

第一章 仁勢物語の位置

第一節 時代背景

『仁勢物語』の成立した近世初期は、『伊勢物語』を始め
とする古典流行の時期であった。それには新時代への不安
から来る懐古心や印刷術の発達に伴う版本の普及といった
原因があげられるが、殊に『伊勢物語』の場合は、中世以
来の知識階級での人気と、近世の享樂的精神に通ずるよう
な、内容の好色性とが庶民に受けて、ちょっとしたブーム
が捲き起こったのである。

また、平和な時代の到来に伴う、町人という読者の台頭、
さらには彼らの尽きることのない知識欲が、仮名草子の形
態に様々なバリエーションを与える結果となったのである。

第二節 「俗」の位置

当作品における「俗」とはどういった種類のものかを定
義するため、取り扱われている言葉や事柄をざっと眺めて
みた。そして、それらのいづれをみても、一般の町人、あ
るいはそれ以下の庶民の生活と関連の深いものがほとんど

であり、しかも多数散りばめてあるので、作品全体の印象はかなり野卑で下賤なものとなっているとわかった。ただ、これのみが「俗」の中味だとは決めつけられないがそれについては次章以下で考察していくこととする。

第二章 「俗」化の方法について

第一節 方法の分類

『仁勢物語』の「俗」化の方法として、最も基本となるのは逐語的もじりである。しかしそればかりに終始していかねど、他の目的に重点を置いていられると思われ部分も多いようである。このことに関して、^{金澤}高橋清隆氏が、作者の興味の方向は、おおよそ三つの点にまとめることができる^{と述べている}。その三点は、

(1) 逐語的もじり

(2) 話題性の構築

(3) 笑話性の構築

だとしている。高橋氏の説明によれば、(2)は「滑稽味よりも題材にニュース性、新奇性を求めているもの」であり、(3)は「語のもじり以外の場面ないし話のレベルで滑稽味を出しているもの」となっている。この説に非常に共感を覚えたので、これを基にして、各章段をそれぞれ「俗」化の最大のポイントとなるものは何か、によって分類してみた。その場合(2)と(3)は、さらにこれを具体的な内容によって細分化して分類を行った。すなわち、

(2) 話題性の構築

- A 当時の時勢、風俗を描いたもの
- B 実在の人物を登場させたもの
- C 先行文芸の一部を持ってきたもの
- D 怪異譚・動物譚

(3) 笑話性の構築

- (イ) 食物や金銭に関わる行為
- (ロ) 病氣や身体の欠陥
- (ハ) 性的なことに関するもの
- (ニ) その他

のように分けた。各章段がどのように分類されたかは、〈表1〉の通りである。それぞれの内容については次節で述べるのでここでは省略する。

仁勢物語
 <表1>

(3)					(2)				(1)	分類	
(ニ)	(ハ)	(マ)	(イ)		D	C	B	A			
89	8	13	2	金銭	食物	6	35	5	12	7	章 段
	11	18	3	10	81 1	85	82	79	21	26	
	31	27	4	17	87 9	111	83		33	36	
	40	49	15	32	96 14	123	104		37	38	
	42	55	30	64	98 16				65	41	
	43	60	56	73	101 19				77	48	
	47		62	88	106 20				102	51	
	54		67	92	110 22				103	52	
	58		74	97	114 23					53	
	61		94	125	116 24					66	
	63		95		120 25					78	
	69		105		121 28					86	
	70		109		122 29						
	71		112		124 34						
	72		113		39						
	84		115		44						
	90		118		45						
	91				46						
	93				50						
	99				57						
	100				59						
	107				68						
	108				75						
	117				76						
	119				80						
				9	37						数
26	6	17		46		4	4	2	8	12	
95						18					
					113						
					125						

第二節 方法の分析

〈表1〉の分類に従って分析を行ったものの内からいくつか章段を取り上げてみる。

(1) 逐語的もじり

〈表1〉をみてもわかるように、ここに分類した章段は十二と意外に少い。これは、あくまでも最大のポイントに留意しての分類であるためこういう数字となったが、実際、逐語的もじりの一つもない章段は百二十五段中一段もないといつてよい。

さて、(1)の例として第七段を挙げることにする。

・をかし、男有けり。京に在りわびて東に行けるに、伊勢・尾張に、鮑、蛤の海面にあるを、人のいと多く売りけるを見て、

いとどしく好きぬる貝の恋しきに

羨しくも買へる人かな

となん詠めりける。(七)

・むかし、男ありけり。京にありわびてあづまにいきけるに、伊勢・尾張のあはひの海づらをゆくに 浪のいと白くたつを見て、

いとどしく過ぎゆく方の恋しきに

うらやましくもかへる浪かな

となむよめりける。(伊)

〈尚、(七)は伊勢物語、(伊)は伊勢物語の略。傍線は筆者記。以下同様とする。〉

この段のポイントは、伊勢物語の「あはひ(間)」「かへ

る(返る)」を、「鮑(あはび)」「買へる」としたところにある。それによって、「過ぎゆく方」を「好きぬる貝」への語呂合わせも生まれ、全体として、東へ向かう男が道端で貝を売っているのを見て、「好きな貝だから買う人が羨ましい」と詠んだ、という話ができ上がるのである。

(1)逐語的もじりの章段というのは、言葉を同音や音の近い他の音に言いかけたりにして、『伊勢物語』との内容のずれから生じる滑稽さを目指したものである。それが、前にも述べたように、百二十五段中十二しかないというのは、如何に他の要素を盛り込むことを目的とすることを意識して、「俗」化がなされたかの表れであるといえよう。

(2) 話題性の構築

まずAの当時の時勢、風俗を描いたものの例として、第三十三段を挙げておく。これは鳥原の乱に出征していく男とその妻のやりとりの話になっている。

・をかし、男、肥前の国高来郡、鳥原の城へ向ひける。

女、此度生ては又は帰らじと思へる気色なれば、

足手より身内の皺のいやましに

君に年をも寄せますか

返し、

籠りぬる大人数をばいかでかは

無勢に先をさせてみるべき

夷中人の言にては、善しや悪しや。(七)

・むかし、男、津の国、菟原の郡に通ひける女、このたびいきてはまたは来じと思へるけしきなれば、

あしべより満ちくるしほのいやましに
君に心を思ひますかな

返し、

こもり江に思ふ心をいかでかは
舟さす棹のさしてしるべき

あなか人のことにては、よしやあしや。(伊)

島原の乱は寛永十四年十月から翌年二月にかけての出来事である。平和な近世初期において最も世間の耳目を集めていた戦いであった。また、この戦いには、自己の仕官出世の道を開くため、数多くの浪人が歩兵として出征し奮戦した。この段に描かれている男女もそうした人たちなのだろう。このような話へと作り変えたきっかけは、『伊勢物語』の「このたびいき(行き)ては、または来じ」を「此度生ては又は帰らじ」としたことにある。そこから島原の乱という戦の場面を着想し、夫婦が今生の別れになるかもしれない状況で互いの身をいたわり合う、という滑稽さとは程遠い美談を成立させている。他には、キリシタン弾圧(十二段)、撰餞制度(三十七段)、女郎と若者の駈け落ち(六十五段)、若衆歌舞伎(百二段)、等当時の世相や、民間に流布した風俗を鋭く観察して、うまく取り入れている。次にBの実在の人物を登場させたものに分類されたのは二章段である。このうち第五段に登場するのは「名人の碁打」である。正確には、名人の所へ習いに行っていた男が主人公だから、名人本人は登場するわけではないが、やはり当時の名人(三代本因坊算悦日信||日蓮宗寂光寺住職、

万治元年(一六五八)没行年四十八歳)の想起を狙ったものと考えられる。題材に真実味と親近感を持たせるのが主な目的であったのだろう。

Cは先行文芸の一部を持ってきたもので、該当する四章段のうち三十五段と八十三段が謡曲から、後の二つが平家物語から取材したものである。例えば八十二段には平維盛の出兵及び出家の話(平家物語卷十「横笛」)同「熊野参詣」が盛り込まれているが、これを『伊勢物語』八十二段の詞章及び文章の構成をくずさぬように章段形成してゆくのである。「世の中にたえてさくらのならせば春の心はのどけからまし」(伊)の歌を、維盛と運命を共にした家臣の一人が詠んだとして「世の中に絶えて妻子の無かりせば今の心はのどけからまし」(仁)と変えている。平家本文に維盛が八嶋から出兵したのは都の妻子恋しさの故であったとの記述もあり、当を得た賛歌であるといえよう。

先行文芸を取り入れて話題性の提供をするという方法は、その先行文芸と、『伊勢物語』との両方を充分吟味して、形成していかねばならぬので難しく、しかしそれだけに作者の腕の見せ所ともいえるので、作者もそれを意識してか、いずれも完成度の高いものとなっている。

Dの怪異譚・動物譚は四章段で、それぞれ鬼子(六段)、天狗(八十五段)、猫とねずみ(百十一段)、ねずみと男(百二十三段)が登場する。このうち百二十三段は、礼記の一節をも基にして工夫を凝らした章段形成をしている。『仁勢物語』が単なる滑稽文学と趣を異にする所以は、

こうした話題性を汲み入れた章段の存在にある。一体これらの章段はどういう意味を持つものなのか。それについては後で触れることにする。

(3) 笑話性の構築

〔表1〕に示すように、ここに属する章段は九十五段あり、最も多い。これらは勢語のもじりを行いながらもそれのみに留まらず、独立した面白味を醸し出している章段の数々である。

まず、(イ)食物、金銭に関する行為であるが、あまりに多数のため表では分けてみた。例としては、食物の方の第二十九段を挙げる。

・をかし、山寺の稚児たちの花見に、飯酒も無かりければ、腹に飽ける菜飯はいつも食ひしかど

今日の花見に煮る米も無し (仁)

・むかし、春宮の女御の御方の花の賀に、めしあづけられたりけるに、

花にあかぬ嘆きはいつもせしかども

今日の今宵に似る時はなし (伊)

『伊勢物語』の「めしあづけられ」から、「飯」を連想して、原文が花の賀のことなので、花見の場面としたものと思われる。歌の中の、「嘆き」を「菜飯」としたのも、単に頭韻や語呂合わせばかりでなく、春という時節、山寺の稚児であること(「菜」にたんに菜っぱというだけでなく、菜の花、山菜の意も含まれるとする)等とうまく関係づけられており、周到な作者の態度がうかがえる。

(ロ)の病氣や身体の欠陥に関するものとしては、第五十六段を挙げておく。

・をかし、男、臥して無で、起きて無で、思い餘りて、わが頭は夏の蛸にあらねども

暮るれば月の光なりけり (仁)

・むかし、男、ふして思ひおきて思ひ、思ひあまりてわが袖は草の庵にあらねども

暮るれば露のやどりなりけり (伊)

「草の庵」を「夏の蛸」に変えたのは逐語的もじりとはいえない。この段全体としては逐語的もじりといって差し支えないし、原文を知っていた方が面白いことは確かである。しかし、禿げた頭をこのように詠んだという滑稽さがかなり出ていることに注意すべきであろう。

(ハ)の性的な話は全部で六段あるが、(ロ)の病氣ほどはっきり書いてない。ほとんどが隠語で何となくそういう話とわかる程度となっている。やはり性的な話は露骨にするには抵抗があったらうし、また却って隠語などを使ってほかした方が、そういう話としての効果があったのである。

最後に(イ)のどれにも当てはまらないものを(ニ)その他として分類した。主に人の悪癖や性格、変わった職業、天災などに関するものである。方法としては前の(イ)と(ハ)と同様で原文を知らなくても笑話として自立した面白味があるものとなっている。

第三章 作者の視点と態度

第一節 「俗」に対する視点と態度

二章で行った分析をふまえて、作者の「俗」に対する態度を考察した。その結果、作者は「俗」の外の知識階級の人間であるから、侮蔑の気持ちがあつてこういふものを書いたのかと思えば、そのようなことは全くなく、むしろ多大な興味と関心の姿勢でもって、観察の眼を向けている。

それでいて、決して「俗」に共感したり同調したりしてはいず、作者と作品に描かれた世界との間には常に距離があつて縮まることはないのである。あくまでも「俗」の外から、客観的に「俗」を描き出そうとする態度がうかがえる。

また、話題性の構築を主目的とする章段の存在も、作者にとって近世初期の町人社会そのものが「俗」であつたと考えれば、その社会の出来事も、それを話題として求める読者も大切な「俗」の要素であつたわけである。

第二節 「雅」に対する態度

『伊勢物語』の「雅」を「俗」へと置き換えた作者は、「雅」に対してどういう態度でいたのかを考察した。章段を対比させて、みてみると、『伊勢物語』をとり立てて否定しようとか、批判や諷刺を行おうとは全くしていないことがわかつた。あくまで『伊勢物語』という一大古典の庇護下に作品を置いて、ある種の遊びの精神でもって「俗」加を行つた、という姿勢を持っているのだといえる。

近世初期の、『伊勢物語』をはじめとする一連の古典流

行は、新しい時代への不安からくる懐古心、及び古き良き時代への憧れが、人々の心に生まれたことも原因の一つであつた。作者もそうした古典復興の波にもまれながら、思ひ切つてその敬服する古典の姿を、逆転させることによつて、古典への憧憬の念を示そうとしたものと考えられるのである。

結 び

特別な主義主張もなく、独立した文学世界も完成し得たとはいえないこの作品にあるものといえば、もじりとそこから逸脱した笑話性や話題性、そして古典憧憬と世俗への関心であろう。そうした、自分の難にある様々な志向を、少し捻つた表現のしかたで、できるだけ様々なまま表しかつたのではあるまいか。変にまとまりを見せたり、ある主義を貫いたりしたのは、自分の描きたいものが描けないと考へたのである。

そしてまた、作者は広い知識を持った人であつたからその広い知識のいくらかでも、それを求めている人々に、求めている形で供給したいと考へ、そのために、いろいろな要素を盛り込んだ、『仁勢物語』という作品を書いたのだと考へられるのである。

時代が求めたものを時代が求めた姿で、というと、自己は滅却されているようにも受けとれるが、実は、そういう姿で表すことが、作者自身の望むことであつたのだと、私は考へるのである。

注1 『御伽草子・仮名草子』（日本古典鑑賞講座 昭38・

2）の解説で野間氏は「古典の外形を似せ、古典の文章をも
じることによって、逆に古典的伝統を批判しようとした」
とのべている。

注2 高橋清隆 仮名草子『仁勢物語』論―にせ男としての

作者―（日本文芸論叢 昭59・3・3号）

〈尚、本文引用は、『仁勢物語』が岩波書店刊 日本古典文
学大系「仮名草子集」、『伊勢物語』が、小学館 日本古典文
学全集「伊勢物語」による。〉

